

岡本韋庵『支那事情』翻刻（上）

解題

一、本翻刻の目的と著者岡本韋庵について

韋庵岡本監輔（一八三九（天保一〇）〜一九〇四（明治三七））は徳島県出身の儒学者であり教育家である。岩波文庫に収められた中野道遥『逍遙遺稿』（岩波文庫の題は『訳文逍遙遺稿附原文』）で、一九二九（昭和四）年刊、訳者笹川臨風および金築松桂）の序を、明治二八年六月の日付で書いていることから窺えるように、その活動範囲は、一地方の教育家に限定されるようなものではなく、かなりの著名人であったようである。ただしその経歴には残念ながら不明な部分が多い。サハリンすなわち樺太に関する数多くの業績は比較的知られているようであるが、彼のもう一つの大きな活動である、

真 銅 正 宏

清への数度の訪問についても、全くといってよいほど顧みられていない。

幕末の高杉晋作の『遊清五録』を始めとするいくつかの清国旅行記とでも名付くべき作品群の末端近くには、例えば一八九七年（明治三〇）年渡清の永井荷風の「上海紀行」（一八九八年二月、『桐陰会雑誌』）などが連なっている。さらに一九二二年、奇しくも明治の終焉と年を同じくして清朝が滅亡した後、大正期に入ってから上海に渡った徳富蘇峯や谷崎潤一郎、芥川龍之介らの目にも、清時代の余風が強く残る町の姿が入ったものと考えられる。このように、日本人の清国旅行記は、清の滅亡後もしばらく、つまり大正期をも含めて、一つの系譜を為していたといえよう。

ただし、大正期に比べ、明治中期頃までのそれは、一八八四年から一八八五年にかけての日清戦争とその前後の日清の關係から、さ

ほど多く見られるわけではない。むしろ極めて少ないとすべきであろう。したがって、その空白期に渡清している岡本韋庵は、極めて貴重な証言者たる位置にあるわけである。

ところが、岡本韋庵の旅行記および清に関する記述は、まったく世に知られていない。彼の著書は総数で数百点に上ると見られるが、活字となったものとなると、昭和三九年になって、徳島県教育委員会の手により、彼の自伝と樺太の経営に関する『窮北日誌』が、『岡本氏自伝』として復刻されたばかりで、多くの彼の清への旅行記も、他の著作とともに、筆写本のまま徳島県立図書館に所蔵されただけである。

翻刻者は、徳島大学総合科学部助教授有馬卓也（中国文学）とともに、膨大な量に上るこれら清国への旅行記の翻刻を企図した。まず漢文体で書かれたものを書き下し文に直すことから始め、現在、以下のとおり進行中である。

有馬卓也・真銅正宏「岡本韋庵『支那遊記』翻刻・訳註（その一）」

（一九九五年三月、『徳島大学国語国文学』）

有馬卓也・真銅正宏「岡本韋庵『支那遊記』翻刻（その二）」

（一九九六年二月、『言語文化研究』）

有馬卓也・真銅正宏「岡本韋庵『支那遊記』翻刻・訳註（その

二）」

（一九九六年三月、『徳島大学国語国文学』）

有馬卓也・真銅正宏「岡本韋庵『支那遊記』翻刻（その二）」

（一九九七年二月、『言語文化研究』）

有馬卓也「岡本韋庵『烟台日誌』翻刻・訳註」

（一九九七年二月、『言語文化研究』）

有馬卓也・真銅正宏「岡本韋庵『支那遊記』翻刻・訳註（その

三）」

（一九九七年三月、『徳島大学国語国文学』）

その過程で、同じ岡本韋庵の書いたものに、漢文体ではなく、漢字片仮名混じり文のいわば地理案内が見つかった。これは日誌ではなく、ある時点で一まとめに書いたものと思われる。本稿は、これを翻刻したものである。

本文は、高杉晋作の『遊清五録』に、内容、文体ともに似ている。しかし、自ずからなる視点の違いも見受けられる。いずれにせよ、幕末から明治初頭にかけての日本人が、清という大国をどのように見ているのかは、のちの日本の一部の知識人たちに流行した「支那趣味」を鑑みても、尊敬と侮蔑の入り交じった、日本人の両義的な対中国意識の早い時期の表れとして、興味深いところである。

もちろんその記述の際、差別意識など、ところどころに、現在か

ら見て不適切な表現も含まれているが、原文の歴史的意義を尊重して、ここでは原文のまま翻刻した。その実際の手続きは以下のとおりである。

二、凡例

- 一、本翻刻は、徳島県立図書館所蔵の岡本韋庵の未刻本のうち、『支那事情二』と題された、清国の形勢について述べた冊子を翻刻するものである。同図書館には『支那事情一』と題された未刻本も所蔵されているが、両者の内容は連続せず、それぞれ独立したものと考えられる。また『支那事情一』は文章も文字も乱れが目立ち、判読不可能な部分がかなり多い。したがって、未定稿の可能性も高いので、今回は翻刻は見合わせた。
- 一、該本の書誌は、以下のとおりである。「明治初期」写。仮綴一冊(ただし同図書館に於いて整理の折、保護の為に付したと推される仮表紙あり)。縦二四・八cm、横一七・五cm。墨付四十五丁。毎半葉十一行。なお、(9—1)で始まる数字は、一丁の表裏それぞれに順に便宜的につけた番号であり、うち「9」は、徳島県立図書館の整理番号(『岡本韋庵先生蔵書及原稿目録』による)である。また、各章の題は、欄外に岡本自身が書き付けた見出し的な表記に、翻刻者が通し番号を付したものである。また欄

外表記のうち、段落分けを伴わず、小題と見られるものは、〈 〉で囲み文中に含めた。

- 一、原文には、のちに書き加えられたと見られる訂正が若干見られる。本翻刻では、これをも取り込み、完成原稿であると見られるものを本文とした。

- 一、原文は、漢字片仮名混じりの文であるが、片仮名は平仮名に、旧字は新字に直した。「フ、氏などもそれぞれ「こと」「とも」などと平仮名に直した。ルビは原文のままであり、() 内の註は、原文に付された左註である。また読み易さの助けとして句読点を施したが、原文には一切ない。

- 一、原本のちょうど半分ほどの箇所には、一ページ分の空白がおかれ、内容もそこで区切られている。本翻刻もこれに従い、この箇所でも分け、便宜上「上」「下」二部構成とした。今号はその「上」の部分の翻刻である。なお「下」については次号に掲載予定である。なお、翻刻に際しては、徳島県立図書館に格別の御配慮を賜った。記してここに改めて感謝したい。

翻刻

一、上海及び其近傍の形勢

清国十三港の中にて、我邦に近く最も繁盛なるものは、江蘇省の上海に如くはなし。上海は、一名を春申浦といひ、又黃浦ともいふ。

戦国の時に、楚の相国春申君黄歇が経始の地なるをもて此名あり。

我が長崎よりは二百五十里許に過ぎずして、滬江の傍に在り。船の水に入ること二丈四尺以下なるものは、直に其岸に達すべし。周圍に数多の小河あり。土地低湿にして氣候常に等しからず。夏は南風多く、秋冬は東北風多し。臘月立春の交に雪あり。夏季より秋季に至りては、疫癘流行し、人の死するもの多し。夏は食物を減して保養するを可とす。久しく此(9-1)地に住するとき、血液衰枯するの恐れありといふ。上海近傍は、白堊(はに)の土にて石礫(こいし)などあることなし。路傍に大小の溝渠ありて縦横に相列し、其広さ或は四五間に至るものあり。楊柳芦葦など多し。川身の深きものは、紺碧にして底を見ず。往々に木石もて橋を架す。二三尺より四五尺に至りて等しからず。田野平坦にして、土人ども或は両三家或は五六家づつ各処に散処せり。屋を葺くに瓦磚(かはら)を用う。屋背(やね)の高さ二丈に過ぎず。百穀の藁稈(わら)な

どを屋傍に堆積せり。米は脂多く香美なること我邦の産にも譲らず。我邦の米は固より上好なりといへども、之を艶称(うらやみほめる)せしは此際の土人とは思はれず。又家々の屋傍に樹木を列植するに、榆柳など甚だ多く、頗る風致あり。北(9-2)方諸処の貧陋なるに似ず。蓋し江蘇一省の納税は全国の出す所に匹敵する程なりといふ。土地膏沃にして、各省物産の上海に出入せざるものなきがためならん。昔時は楊州をもて繁華の最と称したりしかど、今は去りて上海に移れり。上海には土人の現に住するもの二十余万人にして、西洋各国人の居留するものも二三万に及ぶといふ。顧ふに、清廷一変の後は各国共護の一小国を生ずるに至るべし。

一、楊子江の形勢

楊子江は亜細亜第一の大河にて、江水の海に注ぐ処は凡十里許の広さに及ぶべし。中央に崇明島あり。人家一万軒に過ぐといふ。島外七八十里の海面は、江水を受けて尽く紅赤色を帯べり。崇明の外より江に浜るに、初は五六里の広さなる(9-3)もの漸く狭くして、鎮江の辺に至れば三四十町なるべし。此より浜りて武昌に至る間は、少しく広狭ありといへども、率ね三四十町許なるべし。平流にて往々深淺の一ならざる処あれど、鎮江九江安徽など、いづれも大蒸氣艦を岸下に繋ぎ、端舷を要せずして直に艦中より乗下すべし。汽

艦は四川の重慶府まで達す。其地は江口より七百里の許に在りといふ。其間の繁華は漢口を第一とし、南京は之に次ぐべし。漢口は漢水の江に入る処に在り。江を隔て、南に武昌城あり。商況の繁盛なること上海に譲らず。水利の要を估めればなり。

三、烟台及び其近傍の形勢

清国の北省なる天津營子の諸港は、土地卑湿にして氣候屢変じ、外人の始めて其地に住するもの、動すれば疫癘諸（9—4）疾を患ふることあり。たゞ山東省の烟台地方は、地氣疎通して海風つねに清氣を送り、最も人の健康を保するに宜しきこと清国の諸港にて第一と称す。烟台より二十里の外に東湯といへる温泉あり。硫黄の氣を含みて我邦熱海の温泉に髣髴（さもにたり）たりとかや。烟台近傍にて勝地と称するものは、登州府の蓬萊県に如くはなし。該府は烟台の西北十六七里の処に在り。山東第一の水鎮たり。水師提督ありて海陸軍を指麾（さしず）すといふ。県城は石壁を四周し其中の広さ方二十町許なるべし。人家は四五千なりとぞ。其北に更に一城あり。其中は湖池にて南北十町東西七八町なるべし。城上諸処に大砲を架せり。是を水城とす。其北なる高処に蓬萊閣あり。平地より高きこと十七（9—5）八丈なるべく、朱欄燦然（あざやか）として日に映ぜり。閣の後は大巖壁立して海に枕む。高さ十丈もあるべし。

又県城の南は一円の田圃にて、南山に属し、漸く高し。其間は一三里なるべし。山上に南嶺廟とて一祠あり。西方六七町の処は閣よりも高く、山を隔て、海水隠見せり。北方に島嶼の羅列するを望む。極東の一島は囲み十町許なるを常山と名づく。其西なる二三の小島を小黑山と名づく。更に一二島の遠洋中に在るを大竹山と名づく。更に西なる一島を廟島と名づく。廟島の傍に珍珠門といへる処あり。輪船（じょうきせん）を住すべしといふ。珍珠門と閣と相距ることは凡二里許なるべし。布帆の風を受けて往来するを望むに、殆ど描けるが如き景色あり。東に海水の湾環せる（9—6）二処あり。沙浜潔白なり。閣の東西に海潮の出入せる一処あり。広さ四五丈なるべし。清人は此地を称して神仙常遊の境と称したりしかども、山に一樹を見ざるこそ遺憾なれ。蓬萊県は黄邑樓邑と相接せり。二邑は最も繁盛なりと称す。中にも黄邑は人家みな瓦を覆ひて草屋土屋などあることなし。丁百万ちふものあり。財産富饒なるがため他人より百万と評するなれど、実は三百万に過ぐる身代なりといふ。此際諸邑みな壘（そこ）を山上に築きたり。前に毛髮の乱ありしとき、賊軍も官軍も齊しく民財を横奪して村落一空となるほどに、山に登りて避けたりしとむ。樓邑に愛山ちう一大山あり。昔時唐王が嘗て營を山上に構へたる蹟あり。山上に清泉あり。地勢も（9—7）広坦にして運糧に便なり。兵卒十五万を住すべし。風景も絶佳なり

とかや。窃に案ずるに、此際は山海の險要にて、譬へば我が西京に兵庫あり、東京に下田あるが如し。外人をして此処に割拠せしめなば、忽ち北洋の海運を阻遏（へだてとどむ）せらるべき恐れあり。

又西に向ひて数十里の外に進めば、直に齊燕の大野に出て河漕を断絶せらるべき虞あり。殊に水清く土美にして庶物繁殖（しげりふゆる）し、樹石なども乏しからずといふ。敵人の資ならざるはなし。

然るに清人が最も長ずる所の馬兵も、山險なれば馳逐に便ならで、其術を施すに由なし。後來清人の患は、此地を第一とすべきものならん。又煙台の南一日程の処に文登県あり。其管する所に理島あり。陸地と相連りて路を通せ（9—8）り。湾中に大小帆船を安泊すべしといふ。外人をして此辺より上陸し、内地に転戦して要害に割拠せしめなば、是も亦一大患なるべし。

四、天津及び其近傍の形勢

天津近傍は地勢平坦にして、水沢のみ多く、芦葦叢生せり。村落は率ね白河に沿ひて各処に点綴し、人家みな土屋にて甚矮し。家の周囲には多く榆柳を植えたり。白河口に砲台あり。河の左右に屹立せり。河に遡ること三里許にして、左岸に一大砲臺あるを新城とす。

河の広さ一町許なるべし。輪船は潮の漲るを待て河に入れり。十里許にして天津に達す。其地甚だ卑湿なり。人徒の喧闐（かまびしく

みつる）なること上海に譲らざるが如しといへども、西洋人など甚だ多からず。廣大の樓屋は最も少し。此地よ（9—9）り北京に至るは三日程に盈たず。広坦にして其涯を見ざる中より、白河綦細（めぐり）して流れ、風帆隠見して目に入れり。田間往々に樹木の

点綴するものあるは、村落に非ざれば墳墓なり。土性は白壤なるがため、車馬の疾走することに飛揚して空を蔽ふに至り、又道路の甚だ荒穢（あれきたなし）しけるがため、雨ふるごとに車轍（あと）の泥中に入るもの七八寸より一尺以上に至れる処多く、其田は夏秋の間は蜀黍幹（たかきびのみき）矗（なおやか）立して、深林中を行くが如く、冬春は一二尺の上より其幹を刈りて悉く根株（かぶ）を存しければ、意の如くに車馬を馳すべからず。往年英仏の来り寇せしときは、清国武備解弛の運に乗じ、直に北京を衝くに至りしかど、今日に至れば、天津各処の武備も稍修りたる上に、地形（9—10）の不便なること依然として旧に依りければ、容易に上陸すとも偉功を奏せむとは覺束なし。英仏人も、芦塘江より上陸せしもの大に功を奏したりといふ。其地は白河口より七里の東に在り。河水は狭しといへども、水底は白河より深し。今日の警備は頗る嚴なりといふ。

五、天津以東海岸の形成

天津以東の海岸は、山海関を過ぎて牛莊に至るまで頗る長しといへども、其間に良港と称するものあるを聞かず。直隸の灤河は源を熱河に發し、南流して海に注ぐ。凡清里八百里と稱したりしか。海口より三百里と称する上なる永平府の傍にて、河の広さ二丁、深さ丈余に至り、帆船の往来するもの甚だ多し。河口は定めて人煙繁盛に船舶輻湊（あつまる）するならん。山海（9—11）関は北京の東百里許に在り。山勢突出して海に枕たり。山下より海に至るは一里余なるべし。関は其中央に在り。城壁を四周して九里と称せり。城の内外なる居民は二千戸に過ぎず。石河といへる一小河ありて海に注げり。海水は一碧にして目を遮る島嶼（しま）などあるを見ず。舟船の往来するものも少し。蓋し港灣と称すべきものに非ず。此地に関を設けたるは陸地の敵に備へたるものにて、海上には関せざるにや。山海関の東三日程の処を連山といふ。其海中に二島ありて灣形を成せる処を天交廠と名づく。其灣は甚だ深からずといへども、潮侯の頗る高きをもて潮の来るに遇へば、大船も入ることを得べしとぞ。此処より牛莊の際に、水四宮とて、海岸に堡壘（9—12）を築き、戍兵を留めたる処あり。其地勢は頗る要害なりとかや。

六、營子及び其近傍の形成

營子港は牛莊の南十里許にして、遼河の口に在り遼東の一埠頭（みなど）たり。土地卑湿にして、潮至るごとに路上すべら池の如く、水性も極めて悪し。此処は百年前までは尽く斥鹵の場なりといふ。今も東北四五里の間に亘り塩域（つちしほ）にして、樹木を見ず。港頭に人家万余あり。多くは山東の各処より来り住するものにて、冬間は大半販郷すといふ。蓋し山東は田園に乏しく、耕種するに足らずして、過活（くらし）しがたきゆえ遼東に徙り住するもの日に多しとかや。遼河は広さ三四町あり。潮漲るときは深さ五六丈に至り、落潮にも二三丈に下らず。河中往々に（9—13）木標（きのしるし）を立て、浅沙を表したりしかど、輪船の河口に入るは必しも潮侯に拘らで、二里外に達すべし。天津に比すれば最も良港と称す。近地にては牛莊の海域を頗る殷盛なりとす。人家一万五六千戸ありといふ。營子港を距ること一里許の処、侯家油房あり。其地に富人王姓あり。方四五町の際に煉瓦壁を環らし、宛も王侯の宮殿の如く、門内に數十匹の馬を繋ぎ、外に多く方石柱を建て、上に獸形を彫刻（ほりきざむ）せり。斯の人は三百万金を蓄へたる身代にて、多く兵卒を抱へて寇盜に備へける由なり。又（9—14）營子より七十五里と称する東に、一山を隔て、益州あり。人家五千許あるべし。此

より東は朝鮮の境界に至るまで悉く山險の地のみ多く、平坦の地は甚だ少しといふ。又管子より六里の東南に海水湾入せる一処あり。波光明滅して帆檣數十屹立するを望めり。蓋し良港なるべし。此より以南に復州金州などあり。皆海に浜(そう)して、山脈数十里に連亘せり。往々港湾ありといへども、三五百石積の小丁田船ちうもの、み其中に進むべきのみ。千石以上の船に至りては、悉く港外に在りて装(につみ)運すといふ。金州以東の海岸も皆同じ。人家は多しといへども、生意(にぎはひ)は反て清淡(さびし)なりとかや。漸く朝鮮界に近くして、大孤といへる処あり。良港にて船を泊すべく人煙も繁庶なり。常に戍兵数百を留めたりとぞ。

七、浙江福建二省海岸の形勢

上海以南は余嘗て其地を探らんと欲して未だ果さず。聞く所に拠れば、地氣疎通して人に適し、水性も清潔なるものは、(9—15)浙江省の諸処に如くはなし。寧波・定海など皆海に面して人煙繁盛に、其土人は常に神戸・横浜に往來して商業を事とするもの甚だ多しとぞ。福建省は其南に在り。福州府は人口百余万と称す。街道狹隘にして蕪(あれ)穢せること甚しく、其大路と称するものも、二輪(かこ)を列することを得ず。各家に招牌(かんばん)を掲げたるもの広さ一尺なるべく、廂長く街を蓋ひ雨ふるときは路上に滴り落

ち、行客擠塞(おしふさがる)すること甚し。土人もはら外人を讐視せり。地勢は最も敵を距くに宜し。往々風波險悪にして船を破ることあり。閩江の支派縦横に流れて暗州(かくれす)多く屢その処を變ずるは、固に虞すべきものなりといふ。府外の岡上に墳墓の累々たるを望めり。人民みな岡下平坦の地に住したりしが、外(9—16)人のみは空氣清新なりとて貧人の墳墓を買ひ、之を発掘して房屋を営みたり。廈門は福州に属す。造船場あり。其西の一小島を鼓浪嶼といふ。地氣疎通し、景色優美にして、外人の來り住するもの頗る多し。地に清水あり。常に竹筒(たけのつ)もて船舶に注送(そ、ぎおくる)すといふ。

八、汕頭及び其近傍の形勢

汕頭は広東の東隅に在りて福建に連り、位を漢江の北岸に占めたり。其地は甚だ卑く、水面より高さ一尺に過ぎず。江の南岸は岡阜壁立し、高さ四十丈もあるべし。突出して一高岬を成せり。西人遙に望て標とし、呼て小喜望峰といふ。一島ありて峰と相對せり。其間には水頗る深く、舟泊安穩なり。小喜望峰を過ぎて汕頭に入るに、糖塊峽といへるあり。岩(9—17)石累々として相望み、海漸く縮りて一小峽を成すゆえ此名あり。其傍に更に一島あり。帆船その東より行くに、必ず風潮を俟せざれば危険の虞あり。西風に遇ふとき

は、舟の糖塊峽を出づるもの甚だ少し。江水の屈曲する処に巒岬あり。清兵衛戍せり。氣候の炎熱なることは広東に類すれども、昼間に海風の颯然として至るあり。能く熱氣を解き蚊蚋(かあぶ)を掃ふといふ。糖塊峽の浜に海水浴に宜しき処あり。外客の往て浴するもの多し。されど台湾の峽口と相對するをもて、動すれば、颯風(うみのしほかせ)を患ふるゆえ、土人の家も甚だ矮く、外国船の繫泊するは常に汕頭の前に在り。水深さ六七尺許なるべし。西南風侯の如きは僅に二三尺に過ぎず。江中各処に朶柱(そだ)あり。魚網を繋ぎて(9—18)舟を阻(へだつ)せり。行人衝突して死傷を致すもの多しとなむ。

九、支那土木建築の壮大なる景況

支那人が土木建築の壮大俊偉なるは、真に驚くに堪たるものあり。中にも長城運河を最とし、各省府州県の城郭宮廟を次とす。《運河》運河は杭州に起りて直隸の通州に至る。屈曲して数百里に連り、広さ三十間許あり。歴代運糧の便を奏したる所にして、常に風帆船の往來するあり。河傍諸処に殷盛の都邑あり。時としては寇盜出沒することありといふ。《長城》長城は山海関より起り、嘉峪関に至りて止む。長さ六百里許にして、山嶺より水涯に連り蜿蜒(わだかま)り起伏せり。壁の下は石もて畳み成すもの高さ三四丈より一二丈

に至りて等しからず。厚さ二丈弱なるべし。其上に瓦磚を畳みて女牆(ひめがき)とす。高さ三四尺より五六(9—19)尺に至る。厚さ二尺余あり。瓦は頗る大に重さ七八斤許なるべし。城勢の転ずるごとに必ず堡障を設く。高さ三四丈広さ五六間なるべし。女牆も高さ一丈半許なるべし。四面みな竅を開く。広さ四五尺なり。城の裏面には、三五町ごとに門ありて出入すべし。外面は槎牙たる下に円穴(まるきあな)を鑿つ。囲み二尺なるべし。是は蓋し古の戦法に弓弩(いしゆみ)を用ゐたるが為ならん。庖処より高処に向ひて層級あり。俊絶なるものは壁の如く仰ぎ視るべくして下り瞰ふべからず。石壁は紫黑色のもの多く、間、或は白赤色を雜えたり。紫は秦人の経営に係り、白は明代に重修せしものなりとぞ。真に絶代の土木といふべし。《各省城郭》城郭の盛なるは南京を第一とすべし。南京の外郭は(9—20)一百七十里と称す。高さ七八丈にして厚さ五六丈なるべし。十八門あり。門ごとに三重にて内の二重は厚さ各五六丈なるべく、外一重は十四五丈に至る。内城は四十二里と称す。壮大なること外郭に称へり。北京は四十五里と称す。高さ七八丈にして厚さ南京の如く、其上に車馬を馳せ行くべし。十七門あり。門上樓櫓(やぐら)の高さ二十丈に及び、車馬もて門より出入するに甚だ暗し。蓋し其長さ四五十間もあるべし。是は南京も同一とす。更に内城宮城あり。各省も濟南府の如き、開封府の如き、悉く北京

の規模に譲らず。陝西の咸陽府、四川の成都府など最も盛なりといふ。但戸口は北京を最も盛なりとするのみ。此外各府州県とも城壁を四周せざるものなく、北（9—21）省に至りては各村各邑みな土壁を周圍して其中に住せり。壁、高さ二三丈より七八丈に至るものあり。山東等の諸処には、石壁を山上に築きたるもの累々として相望み、頗る壮大なり。《墳陵》墳陵の制も極めて壮大に、少しく力あるものは高さ六七尺より丈余に至り、囲み四五十歩に亘れり。最も盛なるものは帝王の墳にて、多くは高さ數丈囲み二三百歩に及ばざるものなし。明の成祖の陵などに至りては、方一町にして高さ十丈余もあるべし。前面に長さ十五間高さ三丈余なる三門を列し、門外は一面に煉瓦を敷き、門内は大理石を敷て道路とし、其内に稜恩門あり。門、長さ二十間許にして、高さ広さ之に称へり。稜恩殿は長さ四十間広さ十五間高さ十七八間なる（9—22）べし。前後に蠟石の欄干數多あり。中に丈余の大木柱二十本許を立て、其中に金朱もて鏤み成せる一龕あり。木主に題して成祖文皇帝之廟といへり。次に又門あり。大さ前の如し。次に方径（かくのわたり）二尺にして高さ二丈余なる蠟石の二柱を立て、門とす。旁に香炉台あり。亦蠟石にて長さ三間広さ一間なるべし。次は堂なり。長さ広さ十五間許り、高さ三四丈あり。中より登降し再層堂に至る。亦方十間にしして高さ四五丈なり。其中に青玉質の碑を建つ。広さ一丈高さ二丈余

なり。題して大明成祖文皇帝之陵といふ。其後は即ち山稜なり。其頂の高さ堂と齊し。是は陵城中の大略なり。此処は天寿山とて十三帝の陵あり。何れも壮大を極めたる由なり。門を出で、行くに、道路（9—23）みな瓦石を敷けり。半は廢壊す。一里許にし華表門あり。蠟石もて三門を開き、戟（ほこ）を列するが如し。高さ三四丈あり。次に又一大門あり。此を過ぐれば道の左右に大臣勇將の像十個を列せり。次は馬、次は白卓、次は象、次は獅子、次は虎にて各個あり。二は立ち二は座せり。皆代理石もて造り、真物に比すれば頗る大なり。次に又門あり。前の如し。中に大石碑を建て、乾隆帝が哀明三十韻を刻せり。其四方十間許の処に戟形の一大理石を建てたり。又七八町にして門あり。上に五屋形を列し、中央の最も高きもの四五丈なり。左右は漸く低し。其下に五門を開き方柱囲七八尺のものを立てたり。悉く代理石なり。其盛なる想ふべし。《曲阜の孔廟》山東の曲阜なる孔子の廟域は四里余（9—24）と称す。西に觀徳門あり。瓦屋朱柱にて高さ三丈許あり。門内に柏樹の合抱（ひきか、え）に過ぎたるもの多し。右に十余閣あり。皆高さ三四丈もあるべし。重屋にて朱碧金銀爛燦たり。中に大石碑を建つ。清帝が夫子の徳を頌するものに係る。左は廊廡にて高さ二丈に過ぎざれども、長さは三十丈もあるべし。其前に三門を列す。中央は大成門にて、高さ四五丈長さ七八丈なるべし。大成門より正南一条の路

には、尽く磚瓦を敷けり。南方に正門あり。屹立して高さ八九丈もあるべし。広さ之に称へり。二重屋にて黒瓦を用ゐたり。大成門の右より入り、柏樹の間より進み、階を踰て廟に至る。廟高さ七八丈、長さ十四五丈、広さ五六丈なるべし。黄瓦屋にて戸外前後に各八柱あり。左右(9—25)に各四柱あり。皆囲み八九尺なるべき大理石もて昇龍を刻み、承くるに石鼓を以てせり。戸内の木柱は石柱よりも大に、朱塗にて二本あり。夫子の像は儼然として龕中に在りて南面せり。龕高さ二丈なるべし。像も甚だ大なり。頭に王冠を戴き、瓔珞(かしろのかざり)を垂れたり。前に俎豆香炉を陳せり。左に四龕あり。顔淵・子思・仲弓・伯牛・子貢等の八人を列し、右にも亦四龕あり。曾參・孟軻・宰我・子張・朱子等の八人を列せり。仰て天井を見れば、高さ五六丈あり。彫鏤の巧なる金銀朱碧丹漆の美なる、人目に眩耀(めくるめきか、やく)せり。夫子が像の上に三個の扁額あり。一は題して万世師表といひ、二は德斉^二覆載^一といひ、三は聖神天縱といふ。廟前は悉く石を甃(いしだ、み)せり。左右と前に二重の石欄あり。其前に一条(9—26)路あり。皇帝の往来する処たり。一亭あるを杏壇とす。廟の西なる二室に夫子の父母を祭り、其南なる楽堂に樂器を陳せり。廟後に更に夫人の廟あり。屋瓦青白にして夫子の廟より稍小に、夫人の神主を置き、其柱は麒麟牡丹を彫鏤(ほりちりばむ)せり。廟後の一室は広さ七八丈、高

さ三四丈にして、多く石碑を列し、壁に石刻の詩文を挿めり。皆夫子を頌するものにて、康熙・乾隆の人を多しとす。廻廊あり。夫人の廟より南して聖廟を挟む。高さ広さ三丈許にして、長さ廟門に達せり。殆二町許なるべし。悉く朱柱を用ゐたり。廻廊より左すれば夫子の旧井あり。前に一室あるを詩礼堂とす。即ち夫子が詩礼を校せし所なり。東隣に壁を隔て、衍聖公の居あり。夫子より凡七十五世(9—27)なりといふ。《孔林》孔林は曲阜城の北一里許に在り。其間に石門等数多あり。門に入れば石碑多く、道傍に石獅子麒麟などを列し、道路みな瓦を敷けり。享殿を過ぐれば子思・伯魚の墓あり。次を夫子の墓とす。囲み百歩、高さ一丈二三尺なり。墳上に樹木多し。前に方三四間の石を敷き、石碑を立て、題して大成至聖文宣王といひ、前に香炉燭台^②などを列せり。右に一室あり。子貢が廬せし所にて、中に子貢の神位を安置せり。伯魚・子思の墓は夫子よりは稍小なり。伯魚が墓の側に、宋の神宗が駐蹕亭と、清の康熙帝が駐蹕亭あり。更に数亭あり。其外林中に墳墓累累として相望めたり。皆孔氏なりといふ。其盛なる思ふべし。夫子の廟は各府州県に設けざる所なしといへども、曲阜をもて最(9—28)も盛なりとす。顔子・孟子の廟など之に次げり。其他歴代君臣の廟など盛大を極めたるもの甚だ多し。東嶽・中嶽の廟などは、孔廟よりも大なるが如し。関羽の廟に至りては最も多く、一村落の祠宇といへども、宏壯

にして雲に聳へ、遙に人目に入るものあり。又各処有名の山には、絶嶺に必ず廟宇の巖然たるものあり。《泰山》泰山なる碧霞元君の廟などは、殿堂門廡綺麗ならざるはなく、神像は金銀朱碧もて粧ひ成し、爛然として目を奪へり。更に嶽神廟・青帝宮・元君後宮・文廟などあり。何れも壮麗ならざるはなし。磴（いしばし）道は萦回して山下より山上に連り、峻絶なる処は傍に鉄柱を植て鉄鍊（くろがねのくさり）を貫き、人をして攀縁せしめたるものあり。路傍にも往々に廟宇の綺麗な（9—29）るものあり。斯く土木の盛大なるは、到る処として然らざるはなし。

十、清国地形の大異なる状景

清国地形の大異なるは、我邦の夢想せざる所のものあり。余が目撃する所をもて言ふに、直隸山東の各処にて山に遠き処に至りては、地勢豁然（ほがらか）として太平円の状態を成し、其涯を見ず。田圃の長さ数十町に連り、弯曲（まがる）せること弓の如く、農夫ども三五頭の馬牛を一犁に駕して耕すを速きより望むに、牛たるか馬たるかを弁すること能はず。村落樹木の点綴するもの遠きは淡粧（うすくよそふ）するが如く近きは濃抹（こくなづる）するに似たり。日輪の地より出づるを見るに、大燈籠を掲げたるが如くにて、村里に映帶し風景溫柔にして愛すべし。田間往々に土屋あり。門に曲木

を（9—30）縛（しばる）して竿とし、旗を掲げたり。是は夏月蜀黍の地に満ちて、寇盜の其間より出没するものあるがため、斯く警備したるなどいふ。河南省の鄭州より西行し、滎陽・汜水・鞏県を経て洛水の傍に出づる間は、凡三日程にして、或は高平なる処あり、或は山陰にして高下の等からざる処もあり。南方は五六里の外に山脈横亘し、北は黄河に枕（たづな）めなり。此際、道路四通すといへども、悉く平地より低く、或は深さ三五丈にして、広さ一二丈に過ぎざる処あり。路を行くに、日光を見ずして頗る暗く、四五町ごとに両崖を鑿開して、両車相遇ふときは、一車は此に止り、一車の過ぐるを待て過ぎ去る程なるゆえ、往来互に声を揚げて相知らせたり。又其上に往々に人家ある処あり。橋を（9—31）架（かまへる）して村人往来の便を謀れり。下より望むに甚だ危く見えたり。高平なる地面にして此路あるは宛も豆腐の中を縦横に截り取りたるもの、如く、全く人功に出でたるもの、如し。されども中には深さ十丈、広さ十四五丈に至る処も多く、中々人功とは思はず。土人は之を溝路と呼べり。思ふに、初は斯く深広ならざるも、数千年を経るまゝに、土質流れ去りて、漸く此の如きを致せるにや。鴻溝などに至りては、最も深く溝上に在りて下を歩める牛を視るに、殆ど羊の如くに見えるところ。又、山陰の処は、人力にて左右を築き成したる跡の顕然たるものあり。或は一二丈より四五丈に至りて齊からず。古戦時に当

り、之をもて兵卒を翼蔽し、輜重を運搬(はこぶ)したるも(9—32)のかと思はる。此辺は漢楚の古戰場にて、成阜・敖倉などの故蹟ある処なれば、いはゆる甬道(わきみち)ちうものを築きたる跡なるにや。各村各邑に連りて悉く斯くの如くなるは、決して人力とは思はれず。河南府北邙山より潼関に至る。五六日程の処も皆此の如しとなむ。又、此辺にては、山田の傍に多く洞穴を鑿ちたるものあり。蓋し、貧民の住居か、若くば耕夫の雨旱を避くるためならん。鞏県の西南に青石関・黒石関などいへる処あり。此辺、土人多くは巖壁に穴を鑿ち、左右に柱を立て、門戸を開闔(あけたて)せり。其内を窺ふに、甚だ広く且つ深きもの、如く、戸外に飲食果実を列して行人を待つものあり。又、数多の穴ありて、上下に列するものあり。壁高きがゆえ、相妨げざるに(9—33)や。此制は、陝西・山西などにも多くありと聞けり。河南省の南省の南境なる裕州の辺は、古時、楚国方城の地なりとかや。其地、南方は、南陽県に接して遠く山を望み、土地甚だ広く、東南に向ひて段々に低く、或は一里、或は二三里許にして、高下の勢を異にすること、宛も海面大波の動蕩せる余勢の如く、遠きより望めば、甚だ風致あり。南陽県近傍に至りては、一望平坦なりといへども、西方には、岡陵の起伏するあり。諸葛が臥竜岡は、県治の西北に里許に在り。岡上に立ちて東北に望めば、瑛山・独山などいへる諸小山の曠野中に点綴せる

なり。方城の諸山を望むに遠くして、煙霞香霧の中に在り。東南には、白河の隱見明滅するあり。西方は、岡陵相連りて、其下に村落人(9—34)家あり。風景絶佳にして且つ廣大なる、人をして超然登仙するの想ひあらしむ。諸葛が抱膝長吟して軽しく馳驅を許さるも、故なきに非ずと思はる、計なり。是みな余が目撃する所に係る。余が聞く所に拠れば、楊子江の上流なる澗瀆灘は両崖壁立するもの数十里の間に亘り、人の斬開したるが如く、江水、その中より流る。甚だ狭く、水勢の急なること箭の如く、天造とも人功とも譬ふるに物なしといふ。又、湖南省なる辰谿県の辺は、田腔(たのうね)中に巖石の林立するあり。虎の踞るが如く、馬の奔るが如く、煙雲の遮蔽するが如く、樓閣の参差たるが如く、種々の奇態ありて、名状しがたしとなむ。此外にも極めて趣を異にしたる処など多し。今、悉く之を記載すること能は(9—35)ず。

十一、支那の諸山

支那の諸山は、一も濯々たる童山に非ざるはなし。山は尽く石を戴きて土質を見ること少し。蓋し歴代の間に樹木を斬伐し、根株を発掘せしより、土質流れ去りて巖石のみ存したるにや。古人が徂徠の松・新甫の柏と咏したる諸処も松柏を見ることなく、泰山の壑底には柏樹羅生し、嶺外にも松樹の点綴するを望み、頗る風趣を添ふと

いへども、尽く巖石の間に在りて生発の氣に乏し。其他の諸山は渾て小草の毳々然たるを生ずるのみ。荆棘の類といへども、多く生ずることなし。遠近に樹木の鬱蒼たるを望むは、墳墓と村落あるのみ。孔林は方二三里もありて柏樹・楮木など甚だ多く、最も鬱然たるを覺ゆ。鄒（9—36）県の馬鞍山は、孟母を葬りたる処にて、孟子が子孫の墓多く、一山尽く柏樹を叢生せり。此外にも孔廟を始とし、顔子の廟・孟子の廟など皆然らざればなし。全国に就て言ふも皆然り。但、村落は率ね榆柳などを多しとす。陝西・山西に至りては村落墳墓の樹木も大に少く、往年饑饉の歳などには人民みな樹皮を剥て之を食ひ、一小木も全きものなきほどになりしといふ。四川は山川秀麗なりと其地の人も自負するものありといへども、其実は果して然るや信じがたし。湖南・広東の両省なども樹木は甚だ少く、広東の北部などは殊に濯々として一樹を見ず。往々に煤砒を出すといふ。直隸なども亦然り。直隸諸処は、蜀黍幹もて屋を覆ひ、上より土を覆ひ、又その（9—37）幹もて薪炭に代へたり。諸省の中には、馬糞もて飯を焚く処もありとかや。

十二、支那の古物

支那にて古物の現存するものは墳墓と樹木に如くはなし。余が目撃したる墳墓は、曲阜なる少昊の陵に如くはなし。陵は曲阜の東北

二十町許りの処に在り。史記にはゆる雲陽に葬るいへるもの即ち此の地なり。陵域は南北一町半に亘り、東西一町余に連りて、南に木門を設け、更に中門あり。門に入れば方二尺許の石もて四面より置み上げ、墳に至りて漸く狭くなるやうにし、墳に少祠ありて少昊の像を安置せり。其基は一面ごとに六七尺あり。高さは率ね三丈なるべし。其後に陵あり。高さ二丈なるべく、上に凹き処あり。数処に石露はれ、草莽（くさむら）繁茂せり。下の囲みは凡二百歩許（9—38）なるべし。周圍に柏樹あり。鬱蒼として愛すべし。正門と中門の間に乾隆帝が建てたる二石碑あり。少昊の祀れる詩を刻みたり。少昊より今に至るまで幾んど五千年に垂んとす。孔子の少昊を距るは今の孔子を距るよりも遠し。孔子が陵に詣るの意志はいかにやと想像せらる、計なり。此次は成湯の陵とす。其は曹鼎の南にて、土山集といへる処に在り。下の囲み七十歩にして高さ一丈に過ぎず。是は桐宮のありし処なりといふ。廟あり。前に石碑六箇あり。概ね康熙・乾隆の間に建てたるものとす。凡歴代名君賢佐の陵墓祠廟等に二帝の建てし石碑あらざるはなし。其の人心を取攬するに力めたるを見るべし。樹木は孔廷の松・泰山の大夫松など、其名甚だ高（9—39）しといへども、全く已に枯死して骨を存し、石欄を遶らして之を護するを見るのみ。其側に数尺の囲みなる松栢を指して由孽なりと称すれども、甚だ疑はし。曲阜なる顔子が廟に、円柏

(いぶき)あり。顔子^①が手づから植たるものなりといふ。大半已に朽腐して小枝の上に僅に葉を存せり。石を環らして碑に其由を記したるは、いかにも然ることに思はれず。顔廟の後に夫人の廟あり。其前に五葉松あり。囲み三尋なるべし。二丈の上より幹を分つて直上し、枯枝は多しといへども甚だ繁茂せり。漢代に植たるものなりといふ。更に驚くべきは、嵩陽の扁柏なり。其地は嵩山の南にて、登封県の西北一里許に在り。五代の時に創置せる嵩陽書院ちう学舎あり。乾隆中に重修せる由なれ(9—40)ど、今は人を見ざる許なり。書院の中央に漢封柏あり。一樹は囲み十二三歩にして、枝少しく枯れ、一樹は二十三歩にして、中空に七八人を容るべし。枝葉扶疏として枯枝を見ず。高さは五六丈に過ぎずして方十四五間に横布せり。是は漢代にも既に極古の物なるをもて封したるものにて、清の潘耒が詩にも夏王入^レ山曾瞻視、周公占^レ洛定撫摩、明堂清廟用^三孫枝、福地仙山留^二鼻祖^一、と詠せられたるものにて、今より数百千年を経とも色を変せざるの勢あり。二樹の下に小板を植て、三柏を損傷するものは重処すとあれども、三柏を見ず。傍に五葉松の大き合抱に過ぎたるものあり。漢人の植たるものなりとかや。

(9—41)

註

- ① 左註があるが、判読不可能のため省いた。
原文は「獨」であるが、文意より改めた。